

# 新連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 1 新学習指導要領における目標と教師の姿勢

新教育課程の移行期がこの4月から始まります。平成21年度と22年度は移行措置を受け、算数・数学、理科は補完教材が文部科学省から配布され、先行実施されます。一方、「総合的な学習の時間」の中で実施されてきた英語活動は、領域として「外国語活動」として設けられ、学校の裁量に応じて、第5・6学年で、最大で年間35単位時間実施できることになっており、文科省が一教材として作成した『英語ノート』が配布されます。

本連載では、完全実施の平成23年度から年間35時間を学級担任が中心となって「コミュニケーション能力の素地」を育成するための授業を行うには、どのようなカリキュラムや授業内容、評価方法を取るのが最もよいのかを提案していきたいと思えます。ここで、常に認識しておきたいことは、日本では「小学校から（教科として）英語教育が始まるのではない」ということです。日本の英語教育は、週3～4時間、検定教科書を基本に、英語を専門とした教員が系統的に指導を行う中学校から始まるのです。

外国語活動では、小学校という教育課程において、基本的には他教科や領域と同じように、体験を通して言語や文化に対する理解を深めたり、課題を解決したりする授業の中で英語が扱われる、というスタンスを持つことが大切です。必要に応じて母語を使い、工夫した内容のカリキュラムを組み、外国語を通じて児童のコミュニケーション能力の素地を育成することになります。解決すべき課題が与えられることで内発的動機づけがなされ、グループでの教え合いや学び合いを通して、学習に必然性を感じ、活動への興味・関心が高ま

り、また、それらを持続する活動として、「プロジェクト型外国語活動」を具体的に提案していきます。

### □ コミュニケーション能力の素地

『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』に、コミュニケーション能力の素地とは「小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものである」(p.10)と定義されています。コミュニケーション能力に関わる知識面、態度面、スキル面を一文でうまくまとめ上げています。中学校以降の英語教育を着物や服の仕立てにたとえれば、小学校外国語活動では、糸を工夫して生地（素地）を織り上げていくこととなります。「糸」は「題材」で、「織り方」は活動方法に対応します。詳細は5月号以降で述べていきますが、「糸」の具体例としては、英語絵本や学校紹介、買い物などが挙げられます。「織り方」の例は、「解決すべき課題のある活動」が挙げられ、この活動は、主体的・創造的な学び、共同の学びが基本となります。つまり、コミュニケーション能力の素地とは、中学校以降の英語教育において、教室内外で外国語（英語）によるコミュニケーションが可能となるための技能の向上を図るための基盤です。したがって、小学校では、中学校のように知識、態度、スキルの伸張が並列的にあるのではなく、コミュニケーションへの積極的な態度を育て、興味・関心を喚起し意欲を高めることに、より重点が置かれることとなります。

このような素地を育成する具体的な活動例については、6月号で紹介します。

## □ 総合的な学習の時間とは異なる 外国語活動の位置づけ

平成10年改訂の学習指導要領で創設された「総合的な学習の時間」で培ってきた力とは、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力でした。このために、体験的な学習活動、教科間の枠を超えた横断的、探求的な活動が授業に取り入れられてきました。今回の改訂で新設された「外国語活動」では、総合的な学習の時間で育成してきた力を重視すると同時に、授業内容を言語、とりわけ、英語を扱う活動に特化することを明確にしたこととなります。一言で言えば、外国語活動の時間では、体験的な活動を通じた課題解決的な活動は、これまでの英語活動を含む総合的な学習と同じように行われますが、言語教育という枠組みの中の授業となります。しかし、「聞くこと・話すこと」のコミュニケーション能力を年35単位時間（週1単位時間）で育成することが外国語活動の目的ではありません。このような目標の達成が難しいことは、中学校英語の年間授業時数が、105単位時間（週3時間）でも不十分であったことから明らかです。また、新『学習指導要領』では、外国語活動の授業をすべて英語で行うようには規定していません。加えて、中学校の前倒し的な教科型の授業になることのないように留意しています。小学校の「総合的な学習の時間」に課題解決的に行ってきた英語活動では、授業内容にもよりますが、7～10時間程度で「内容的なまとまり」を持った単元で授業を構成する必要性がありました（東野・高島 2007）。中教審の『答申』（平成20年1月）でも、「小学校における外国語活動の目標や内容を踏まえれば一定のまとまりを持って活動を行うことが適当である（以下、略）」とあり、児童の課題意識や意欲を喚起し、主体的・創造的な学びとなるような活動とするためには、単発的ではなく、単元としてのまとまりを考えていく必要があります。

また、授業を構成するには、この「内容的なまとまり」に加えて「時間的なまとまり」も考慮し

なくてはなりません。「時間的なまとまり」とは、1つの単元を進めていくために、時間をまとめ取りすることです。例えば、7時間完結の単元であれば、週1回で実施すると2か月かかりますが、他教科や領域と時間割を調整して、集中的に1か月で終わることも可能となります。実際には、年間35単位時間を、いくつかの単元に分け、数時間ずつまとめ取りをして授業を進めていくことも考えられます。担任がほぼ全教科を担当することにより、柔軟な時間取りができるのは小学校教育課程の特徴であり、この利点を最大限に生かすことができます。

## □ 移行期間における外国語活動の時間取り

表が示す通り、第5・6学年では、移行期の平成21年度より、年間の総時間数が945時間から980時間になり、1週当たりの時間数が1単位時間増えます（下線付き数字は変更のある時数）。新設された外国語活動は、移行期間では0～35時間の範囲内で、平成23年度より年間35時間実施することとなっています。

表 変更される教科、領域のみの移行期と完全実施の小学校の標準授業時数（第5・6学年）

	時間数に変更のある教科、領域						総時間数
	外国語活動	総合的な学習の時間	理科	算数	国語（5年・6年）	社会（5年・6年）	
変更前		110	95	150	180・175	90・100	945
平成21年度	0～35	75～110	105	175	180・175	90・100	980
平成22年度	0～35	75～110	105	175	180・175	90・100	980
平成23年度	35	70	105	175	175・175	100・105	980

## □ 単元として構成された絵本を使った「プロジェクト」の実践例

Eric Carle のイラストで有名な英語絵本、*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* (by Martin, B.) を使った「オリジナルのブラウンベアを作ろう」という7時間（21M〈モジュール〉、1M=15分）の単元を紹介しましょう。この絵本は、“～、～、what do you see?” という“～”に入る動物への問いに対して“I see ... looking at me.” というように“...”に別の動物名が入り、基本的に同じ問答がなされる英語表現と、色鮮やかな動物が次々と登場する絵本です。リズムカルで児童達に親しみやすいものです。この単元の進め方としては、

- ① この絵本の読み聞かせを聞き、絵本表現を十分に学習し、練習します。
- ② 自分達で登場人物である動物の種類や色を変え、オリジナルのブラウンベアを作ります。
- ③ ②で完成したものを紙芝居や絵本に表現し、発表会をします。

この単元構想では、児童達自身による最終的な発表方法がゴールとして具体的にあり、子ども達の発想で、動物や色を選択したり決定したりできる自由度があります。また、グループで1つのものを作り上げる中で協同の学びを体験することができます。また、児童は、与えられた表現を使うだけの活動ではなく、主体的・創造的な学びが成立します。このような活動が、体験を通して学ぶことの多い小学校の教育活動や小学生の発達段階に合った活動と言えるでしょう。

この種の活動は、総合的な学習の時間の中で福祉や環境をテーマに課題作りをし、それに対して具体的なゴールを決め、調べたりまとめたりして発表する活動と根本的には同じで、これを「プロジェクト」と呼びます<sup>1</sup>。このようなプロジェクトの手法を取り入れた外国語活動が「プロジェクト型外国語活動」なのです。

## ■ 外国語活動で教師が配慮すべき点

外国語活動の授業をしていく上で、教師は次の3点を考える必要があります。

- ① 児童がコミュニケーションを楽しんでいますか
- ② 児童が活動に積極的に取り組んでいますか
- ③ 教師が納得し、自信を持った授業になっていますか

①は、単に楽しんでいるということではありません。「コミュニケーションを楽しんでいるか」ということが重要なのです。授業として価値ある活動を作っていくためには、課題解決や目標達成までの過程に、多少苦しくても練習に励む場面もあり、グループでの話し合いの中では、擦り合わせができず話し合いを重ねたり、修正したりすることもあります。そういった過程を経て、最後に課題解決がなされたときに、その苦勞や試行錯誤してきたことが達成感や満足感へと繋がっていきます。これは、他の教科や領域においても言える

ことです。単にゲーム的なことをして楽しかった、というものは質的に異なります。

人がコミュニケーションをとる場合、互いに持っている情報の差が鍵となります。その差を埋めるために尋ねるという行動が生じてきます。コミュニケーションが自然に生まれてくる環境をどのように教室で作りに出せるかが、②に関わってきます。③では、教師がその授業(単元)や単元の構成、取り組みなどにどれだけ思いや関わりを持てるかです。授業を通して、どのようなことを児童に考えさせたり、いかなる力をつけたいのかをはっきりさせ、それを実現するための工夫を考え実践することが大切です。つまり、教師に「この児童だからこそ」「この教材を取り上げ」「こんな風に活動させたい」という思いがなければ、価値ある授業や活動は成立するものではありません。

前項での絵本を使った単元(プロジェクト)では、絵本や紙芝居を用いて自分の創った話を聞き手に伝えようとし、聞き手は、読み手の伝えたいことを絵を頼りに理解しようとする積極的なコミュニケーションが生じます。教師がこれまで「総合的な学習の時間」で培ってきた課題解決的な活動における支援を、英語を使った活動の中で行うことになり、納得し、自信を持った授業となります。

次号では、プロジェクトについてその特徴をさらに詳しく解説し、年間カリキュラム例の紹介と、担任の役割について触れたいと思います。

### ◆引用文献

- 佐藤隆之. 2004. 「キルパトリック教育思想の研究—アメリカにおけるプロジェクト・メソッド論の形成と展開—」風間書房.
- 佐藤 学. 1999. 「カリキュラム研究と教師研究」安彦忠彦(編著)『新版 カリキュラム研究入門』勁草書房 pp.157-179.
- 東野裕子・高島英幸. 2007. 「小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価」高陵社書店.  
(東京外国語大学大学院教授)

1 「プロジェクト」という語は、学習者の主体性、個性、興味、要求、能力、感性などを生かし伸展させる学習活動を表す用語として用いられています(佐藤 2004:2)。また、総合的な学習の中で教師と児童がともに作り上げていく単元を、佐藤(1999)は「プロジェクト」と呼んでいます。

# 連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 2 プログラム型を包括するプロジェクト型の活動

先月(4月)号では、新学習指導要領の目標である「コミュニケーション能力の素地」について解説し、総合的な学習の時間と外国語活動の内容のまとめりや時間のまとめ取りに関する考え方を示しました。さらに、学級担任の外国語活動の取り組み方に触れました。

今回は、再度、総合的な学習の時間から独立した外国語活動の活動方法に対する基本的な考え方について述べ、次に、これまで「英語活動」として多くの学校で実践されてきた内容や手順を、便宜上、2つのアプローチに分けて考えることにします。今月号より7月号までは、学級担任であれば誰でも可能となる外国語活動の内容を、具体的に提案していきます。

### □ プロジェクト型とプログラム型外国語活動

教科では学習指導要領により目標や内容が示され、これに沿って作られた教科書を基本に、算数科や社会科などでは内容が系統的に積み上げられていきます。国語科では、聞く・話すなどに関わる学習が第1～6学年においてスパイラルに配列されています。これに対して、総合的な学習の時間における活動は、たとえば、福祉をテーマに「私たちの町を福祉の町にしよう」という活動で25時間程度の時間をまとめ取りをして、1つの単元を設定します。児童が見つけた課題を自ら解決していく過程で、必要な活動を選択、決定していくことから必然的に主体的・創造的な学びが生まれてきます。グループ活動や異学年交流などを通して協同の学びを体験することが可能となります。

児童は、この解決の過程で、支援者としての教師や他の児童と共に活動や単元を作り上げるようになります。このような学びは、総合的な学習の時間が創設されて以来、また、それ以前においても小学校では普通に行われてきたことです。

このような単元を「プロジェクト」と呼び、このプロジェクトを集積したものが「プロジェクト型カリキュラム」となります(東野・高島 2007)。外国語活動も、総合的な学習と同じように学級担任が中心となって、児童が主体的に取り組む内容に転換することができます<sup>1)</sup>。

「プロジェクト型外国語活動」の特徴は以下の4点にまとめられます。

- (1) 教師が一方向的に活動を決定したり、学習内容を与えたりするのではなく、教師が支援者となり、児童と共に作り上げていきます。
- (2) 活動には与えられた(あるいは見つけた)解決すべき課題(タスク)があり、この課題(タスク)を解決する過程において、児童たちは必要な活動を選択し決定していくため、必然的に主体的・創造的な学びが生まれてきます。

1 平成23年度から、中学年(第3・4学年)の総合的な学習の時間で第5・6学年との連携を目的として英語活動を行う場合、国際理解活動の中で「問題の解決や探求活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動」(文部科学省:111)を行うこととなります。たとえば、20時間程度の「世界の食べ物を調べよう」という単元では、気候や風土、地形などを調べて、国々の食べものについてまとめ、各国の1つのレシピを英語で言うことが可能です。この内容が、第5・6学年の「フリーマーケットを開こう」などのプロジェクトと結びつくこととなります。

- (3) グループ学習, ペア学習, 異学年交流などを通して, 児童は協同の学びを体験できます。
- (4) 課題を解決するというゴールがあることで, 児童は, 明確な目的意識を持ち活動を進め, 活動への興味を持続できます。

英語の発音や場面における正確な使い分けなどの英語教育の専門的知識に関わる部分に関しては, ALT や英語を専門としている教員などに援助を求めることになります。

これに対して, 1時間<sup>2</sup>, あるいは, 2時間程度で「あいさつ・自己紹介」や「クリスマス」などのテーマを設定し, 内容が予め細かく定められた形式を持った授業が行われていることがあります。これは, 繰り返しを多用し, 言語使用のスキル面の伸張をより重視し, 英語に慣れ, 使わせるという目的で活動の内容の細部まで「事前に決められプログラム化されている」授業です。これを「プログラム型外国語活動」, このような活動を配列したものを「プログラム型カリキュラム」と名付けておきましょう。「プログラム型外国語活動」の特徴は, 以下のようにまとめられます。

- (i) 教師主導による授業の流れが基本であり, 授業内容は準備され, 基本的に, 児童はその指示にしたがって活動を行います。
- (ii) 1時間, あるいは, 2時間ごとに, 色, 天気などのテーマやトピックがあり, 1時間の授業が, あいさつ, 歌, トピックに関する表現, その表現を使ったゲームというように, 飽きさせないために細かなステップに分割されています。
- (iii) 目標を英語が話せる(使う)こととしていますが, 活動は一斉指導による練習が多用され, 表現がパターン化しており, 発話と言うよりは, 暗記したものを言うという活動になりがちです。
- (iv) 歌やゲーム的な要素が多い活動であるため, 低・中学年の児童は興味を持ち, 楽しく活動できます。

このカリキュラムの中では, 児童が立ち止まっ

て考えたり, 選択, 決定したりする機会や場面はプロジェクト型に比べると少なく, 児童が主体となり, 創造的な活動を進めていくことはあまりありません。プロジェクト型は課題解決型の活動を重んじ, プログラム型は言語使用を促進するための活動と考えることができ, 本質的に, それぞれの目的が異なるのですから指導内容に違いがでるのは自然です。

## □ プログラム型の手法を包括するプロジェクト型外国語(英語)活動

前項であげた2つの活動形態のどちらかを選択したり, どちらかに優劣をつけるものではありません。週1時間, 年間35単位時間を小学校教育課程の中で, 学級担任が中心となって, どのような内容が小学生に最も適切かを考え, それを基準として現実的に授業内容を考えていかねばなりません。授業時間数や指導教員, 教材, そして, 児童の発達段階も異なりますので, 外国語活動の授業内容や活動方法は中学校の英語の授業とは根本的に異なった視点から考える必要があります。

プログラム型外国語活動で, たとえば, 歌を歌ったり, ゲームをすることが目標となったり, 「好きな物を英語で言ってみよう」というテーマで“What fruit do you like?” “I like apples. How about you?” などの表現を正確に言えることが活動の目標になっていることがあります。こういった活動では, 週1回の授業ですから, 学習の積み上げができないばかりか, 授業が単発的・並列的になりがちです。また, それらの英語を使用する必然性も脈絡も不明瞭で, 児童の思考や意識の連続性が図れず, 児童が興味を持つ活動とするのは難しいと思われます。さらに, 教師が主導し児童が後に続くという学習形態となり, 児童の主体性

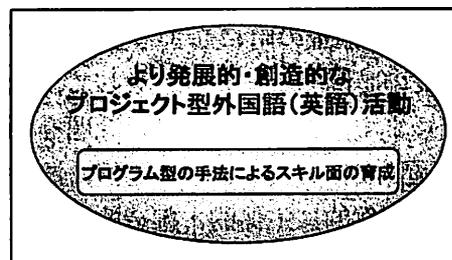


図 プログラム型の手法を包括するプロジェクト型外国語(英語)活動

<sup>2</sup> 本稿での1時間は, 学習指導要領で言う1単位時間のことであり, 実質の時間は45分です。

や創造性が生かされないことにもなります。

このことから考えると、小学生に合った主体的・創造的な活動をしていくためには、プロジェクト型の活動が適していると言えます。しかし、これを進めていく中で、表現を提示し、表現を定着させていくためには練習は不可欠です。ここでプログラム型の手法を使うことが有効であり、こういった練習なしには、価値あるプロジェクト型の活動は成り立ちませ

せん。この意味で、図（前ページ）が示すようにプロジェクト型外国語活動は、プログラム型の手法を包括することになります。

### □ プロジェクト型外国語活動におけるカリキュラム例

表は第5・6学年のプロジェクト型外国語活動の年間カリキュラムです。第5学年で初めて外国語活動を実施する児童や、第3・4学年では、プログラム型の活動を年間1～5時間程度実施し、英語に少し触れた児童を対象として構成しています。

プロジェクト型カリキュラムにおける活動は内容と活動の方法により、3つの型に分けられます（東野・高島 2007）。表中に英語絵本を題材とした「絵本型プロジェクト」は(A)で、紹介・案内を題材とした「発信・発表型プロジェクト」は(B)で、相互に交流することを通して課題を解決する「相互交流型プロジェクト」は(C)で示しています。

年間の時間数が35単位時間ですから、個々のプロジェクトは7～10時間（21～30M、1M=15分）<sup>3</sup>程度で構成され、その中で与えられた（あるいは見つけた）課題を解決していく活動になります。また、プロジェクトとプロジェクトを繋ぐ活動、あるいは、語彙を増やす目的として2～3

表 第5・6学年のプロジェクト型外国語活動の年間カリキュラム例

学年	学期	プロジェクト名 (使用絵本)	活動時間 (モジュール・M)	ALT との TT の時間
5年	1学期	オリジナルの「ブラウンベア」を作ろう (絵本 <i>Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?</i> ) (A)	7時間 (21M)	3時間
		ショッピングモールを開こう (C)	6時間 (18M)	2時間
	2学期	何て説明するの? (C)	2時間 (6M)	
		2年生にお話を聞かせてあげよう! (絵本 <i>From Head to Toe, Whose Nose and Toes?</i> ) (A)	10時間 (30M)	4時間
		世界の料理を調べ、レシピを作ろう! (B)	7時間 (21M)	3時間
	3学期	アルファベットを使ったことばを 見つけよう! (C)	3時間 (9M)	
6年		地図を使って自分の家を紹介しよう! (B)	6時間 (18M)	2時間
	1学期	5年にわかる「ポーラベア」を聞かせて あげよう! (絵本 <i>Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?</i> ) (A)	6時間 (18M)	2時間
		2学期	日本文化を紹介しよう (B)	9時間 (27M)
	Who am I? 歴史クイズを作ろう (C)	5時間 (15M)	1時間	
	3学期	My Story Book を創ろう! (わたしの夢、 ぼくの夢) (絵本 <i>I LIKE ME!</i> ) (A)	9時間 (27M)	3時間

時間程度で「アルファベットを使ったことばを見つけよう!」のようなミニプロジェクト<sup>4</sup>もカリキュラムの中に組み込むことが可能です。

次号では、プロジェクト型カリキュラムを作成していく上での視点と、このカリキュラムで第1～6学年まで取り組んでいる学校の例を取り上げます。そして、第1学年から積み上げがある場合と、第5学年で初めて外国語活動を始めた場合との授業内容の違いについて言及したいと思います。

#### ◆引用文献

- 高島英幸・東野裕子. 2007. 「公立小学校におけるプロジェクト型カリキュラムの展開—プログラム型からプロジェクト型英語活動への転換と文字学習—」【教職研修】8月号 pp.78-83, 9月号 pp.94-106 教育開発研究所.
- 東野裕子・高島英幸. 2007. 「小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価」高陵社書店.
- 文部科学省. 2008. 「小学校学習指導要領」.  
(東京外国語大学大学院教授)

3 1つのプロジェクトにかかる期間と児童の興味の持続の関係などを考えると7～10時間が適当です（東野・高島 2007）。  
4 プロジェクトを支える役割として、また、プロジェクトとプロジェクトを繋ぐ活動として短時間でできる（2～3時間〈6～9M〉）活動を指します（高島・東野 2007）。

# 連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 3 プロジェクト型カリキュラム作成のための視点と具体例

先月（5月）号では、外国語活動としてプログラム型とプロジェクト型があり、プロジェクト型にプログラム型が包括されることを具体例で示しました。また、プロジェクト型の活動は、児童が主体的・創造的となり課題（タスク）を解決していく活動であり、小学校段階に適したものであると述べました。さらに、これらの活動は、基本的には他教科と同じように学級担任による授業内容となることに触れました。今回は、カリキュラム作成の視点や実践について言及します。

### □ プロジェクト型カリキュラム作成の視点

単元（以後、プロジェクト）を集積したカリキュラム作成の際に、次の4点に留意する必要があります。

- ①ゲーム・歌・クイズなどの児童の興味づけや関心を高める活動は、主に、音声面の基盤作りを目的として選択します。
- ②プロジェクトは、必ず発信する場面を設定し、伝え合う力を協同の学びを通して育成できるものとしします。
- ③授業中に児童が自己評価、相互評価ができる場面を設定します。
- ④学級担任は支援者となり、必要に応じてALTなどの専門家に応援を求め、児童が中心で積極的に関わることのできる授業構成とします。

まず、①についてですが、歌やゲームに児童は興味を持ちやすく、繰り返しの練習が必要なりズム、強勢、イントネーションの音声面の習得には最適の活動と言えます。これらは、プロジェクト

型外国語活動で用いる絵本などに出てくる表現に事前に慣れ親しませたり、定着を促進させるものとして利用します。例えば、第5学年の絵本 *From Head to Toe* を用いたプロジェクト「2年生が楽しめるお話を聞かせてあげよう」では、動物の名前を練習するために「ジェスチャーゲーム」や動物の名前や体の部位を使ったチャンツを扱います。また、“I can …” “Can you do it?” などの定型文、体の部位を示すさまざまな語彙の学習を容易にするために、プロジェクトの前半部分でゲームやクイズを行います。語彙や基本的な文構造にゲームや歌で親しんでおくことで、発表に際して、各自がより工夫した表現の練習に集中できるように構成します。ゲームや歌自体を楽しむこととは違い、満足感や達成感を伴った「楽しさ」へと質的に変容することになります。各プロ

表1 各プロジェクトと関連のある歌やゲーム例  
(☆ ゲーム、♪ 歌、◇ チャンツ)

学年	プロジェクト名	歌、ゲームなど
5 学 年	2年生が楽しめるお話を聞かせてあげよう (使用絵本： <i>From Head to Toe</i> )	♪ <i>Head, Shoulders, Knees and Toes</i> ♪ しあわせなら手をたたこう ☆ スリーヒントゲーム (動物) ☆ ジェスチャーゲーム ☆ <i>Simon Says</i> ゲーム ☆ 体の部位ビンゴ ☆ Yes / No ゲーム ◇ 動物チャンツ
6 学 年	5年生にわかる「ポーラベア」を聞かせてあげよう (使用絵本： <i>Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?</i> ) My Story Book を創ろう! (使用絵本： <i>I LIKE ME!</i> )	☆ 動物鳴き声クイズ ☆ 擬態語クイズ ☆ ジェスチャーゲーム ◇ 動物チャンツ ☆ インタビューゲーム ◇ 職業名チャンツ

プロジェクトと関連のある歌やゲームの例を表1に示します。

②では、話す内容があり、相手を意識し、自分が伝えたいことを伝えるという本来のコミュニケーションの場を活動の中に設定することになります。尋ねられたら何らかの反応をし、相手が理解できなければ、工夫して少しでも理解できるようにする。聞き手として理解できなければ、そのことを話し手に働きかける活動がなされなくてはなりません。活動の中で、共に学び、お互いにコミュニケーションをとりながら助け合うなどして、共に作り上げていく協同の学びは、教科・領域の枠を超えて体験すべきことです。

③の自己評価では、活動を振り返り、できたことと、次は何をしなければならないかを明確にしなければなりません。また、相互評価では、お互いの活動を認め合ったり、自分の良さに気づいたりすることが大切です。友だちの発表などを、評価しようという視点を持って見たり聞いたりすることで、発表などに対する関わり方が異なります。常に相手を意識して活動することが重要です。

④は、授業の主役は児童であり、学級担任は活動を支援し、必要に応じてALTや英語の堪能な人材を活用することになります。学習は児童自らするものであり、教師が教え込もうと思ってもできるものではありません<sup>1)</sup>。年間カリキュラム作成の段階で系統性・連続性を持たせるには、第5・6学年の2年間を見通して内容の深まりと活動のつながりを考える必要があります。同時に、各学年の1年間を見通して様々な活動が、できる限り関連性を持つように配列していくことになります。

## 実践校のカリキュラム例 一西宮市立高木小学校の場合

西宮市立高木小学校では、外国語活動の目標を、①コミュニケーション能力（を育成するため）の素地を養い、コミュニケーションをしようとする

態度を育てる。②外国語活動を通して外国の文化・習慣に触れる、としています。また、①国際教育の中で「学級担任が中心で進める英語活動」ということで取り組む。②課題解決的な活動を中心に行うこと、を基本方針としています。同小学校は平成20年度まで、いわゆる英語活動の拠点校であり、第5・6学年では年間35時間、第3・4学年では年間25～30時間、第1・2学年では年間10～12時間実践しています<sup>2)</sup>。

カリキュラムには、第1学年と6学年、第2学年と5学年というような異学年交流や地域、外国の姉妹校などとの交流を通して、伝え合うことができる活動を取り入れています。

## 第5学年から始めた場合と、それ以前に実施した場合の違い

表2（次ページ）は、第1学年から特別活動の時間などを用いて外国語（英語）活動を行ってきた場合の全学年のカリキュラムと、全プロジェクトの授業時間数、プロジェクト内のALTとのティーム・ティーチングで指導する時間数を示しています。

前（5月）号で紹介した「年間カリキュラム例」と表2を比べてみると、第5学年の年度当初では異なったプロジェクトとなっていますが、その他では似通ったものが配列されています。第5学年の年度当初では、第1学年から始めたカリキュラムにはない「オリジナルの「ブラウンベア」を作ろう」が、第5学年から始めた場合の「年間カリキュラム例」にはあります。この絵本は、同じパターンの表現が繰り返されて物語が進み、リズムカルなので英語のリズムが感じられ、単純な繰り返しのため、児童が自然と楽しんで発話することができます。表現に出てくる語彙としては、色、動物など、それまでの学年で学習していない場合でも、'red bird' や 'yellow duck' など、日本語の中で使われている語として児童は知っているものも多く、発音や意味の理解には負担がないと

1 Corder (1967) は、Von Humbolt を引用し、「教師ができることは、言語を教えることでなく、学習者の心の中に独自に育つ言語発達が可能となる環境を作り上げることだけである」と述べています。

2 福井市啓蒙小学校、東京都足立区立千寿小学校、前橋市立天川小学校、石川県津幡町立条南小学校、西宮市立小松小学校などでも学校独自のプロジェクト型カリキュラムを作り実践しています。

表2 2008年度「外国語活動」活動計画（西宮市立高木小学校）<sup>4</sup>

学年	学期	プロジェクト名 (使う教材など)	時間数	
			時間数	ALT 時間数
1年	1・2 学期	いろいろな形でどうぶつを作ろう (絵本 <i>Color Zoo</i> )	4時間	2時間
		わたしはだれでしょう？	2時間	2時間
	3学期	6年生のお話を聞かせてもらおう	2時間	1時間
2年	1学期	5年生にクイズをしてもらおう (絵本 <i>Whose Nose and Toes?</i> )	3時間	2時間
	2・3 学期	英語絵本を作ろう (絵本 <i>The Pet Shop</i> )	4時間 2時間	2時間 1時間
3年	1学期	スポットの紙しばいを作ろう！ (絵本 <i>Where's Spot?</i> )	6時間	4時間
	2学期	高木マーケットをひらこう ミニプロジェクト (何が好き?)	8時間 2時間	4時間
		3学期	家族をしょうかいしよう ミニプロジェクト (学校には何がある?)	7時間 2時間
4年	1学期	シェリダン小学校に 高木小学校をしょうかいしよう	9時間	4時間
	2学期	オリジナルの「ブラウンベア」を 作ろう (絵本 <i>Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?</i> )	7時間	3時間
		ネームプレートを作ろう！	2時間	1時間
3学期	自分の成長をふりかえろう	7時間	3時間	
5年	1学期	2年生にオリジナルの絵本を 作ってクイズをしよう (絵本 <i>Whose Nose and Toes?</i> )	8時間	4時間
		アルファベットを使ったことばを 見つけよう！	4時間	1時間
	2学期	フリーマーケットを開こう 世界の料理を調べ、レシピを 作ろう！	7時間 8時間	2時間 2時間
3学期	ボードゲームを作って遊ぼう！	8時間	2時間	
6年	1学期	外国の人と話してみよう	2時間	1時間
		スクールツアーをしよう	6時間	2時間
		Who am I? 歴史クイズを作ろう	5時間	1時間
	2・3 学期	日本文化を紹介しよう	8時間	2時間
		1年生に絵本の読み聞かせを してあげよう (絵本5種類)	6時間	2時間
	My Story Book を創ろう！ (わたしの夢、ぼくの夢) (絵本 <i>I LIKE ME!</i> )	8時間	3時間	

3 正確には、5語群程度と言った方がよいかも知れません。一息で、「いつ誰が(誰に)何をどうしたか」を表現するにはこの程度が限界だと思います。例えば、「I saw a purple cat in my dream yesterday.」では、a purple cat や in my dream はひとつのまとまりと考えると、この文は5語群となります。

4 外国語活動(英語活動)の時間が高学年で年間25時間、中学年で20時間程度のカリキュラム例は、2008年11月6日付「日本教育新聞」に掲載されています。

考えられます。呼びかけや「I see ... looking at me.」などの表現は不変であるため、色や動物を変えることなど比較的容易にオリジナルの「ブラウンベア」を作ることができます(詳細は4月号参照)。第1学年から進めている場合であれば、このプロジェクトは第4学年で実施することができます。

次に、第6学年で両方のカリキュラムで同じプロジェクト名になっている「日本文化を紹介しよう」を見てみましょう。どちらの場合も、社会科で歴史学習をしたり、既に国語科で漢字の由来や短歌・俳句などを学習したりして、日本文化の時代背景や起源などを理解できる6学年という発達段階に合ったものとなっています。いずれも日本文化を紹介するという点においては変わりません。表現も「This is ~.」「It's famous/popular.」「It's beautiful/great.」「I like ~.」「Because (it's) ~.」の5つを使います。両者の違いは、第1~4学年において実施していた場合、この表現に発展的な表現を加えることができ、4文程度を加えてさらに詳しい説明ができることです。第5学年で初めて学習する場合には、英語表現は最小限の単語数(1文は最大5語程度)<sup>3</sup>で最大限の表現ができるようにし、絵や写真、動作、実演など英語以外の手段も駆使して伝えることができます。同じプロジェクト名であっても児童のそれまでの英語体験を考慮し活動を構成することになります。

このプロジェクト型カリキュラムの中の第5学年の1学期に実施した「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」の実践については、次号で述べることにします。

#### ◆引用文献

Corder, S.P. 1967. "The significance of learner's errors," *IRAL*, 5, 161-169.

西宮市立高木小学校. 2008. 「プロジェクト型英語活動の活動：課題解決で目標明確 2年生に絵本を読み聞かせ」『日本教育新聞』11月6日.

\_\_\_\_\_. 2009. 「平成20年度(2008年度)高木小学校英語活動実践集」.

(東京外国語大学大学院教授)

# 連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 4 絵本型プロジェクトの例と中学校への連携

先月(6月)号では、カリキュラム作成の視点や外国語活動を第5学年で初めて実施する場合と第1学年から実施する場合の内容の異なりなどを比較しました。カリキュラムの中のプロジェクトを3分類し、今回は、取り組みやすい絵本型プロジェクトの実践例と観点別の児童による感想の変容を紹介し、最後に、中学校への連携について触れることにします。

### □ プロジェクトの種類と特徴

プロジェクトは、内容と活動の方法により、3つの型に分けられます(東野・高島 2007参照)。

#### (1) 絵本を題材とした「絵本型プロジェクト」

(本誌5月号の69ページの表中(A)で表示)

このプロジェクトは、英語絵本を題材、絵本の表現を言語材料とし、登場人物を変えたり、話の続きを作るなどの創作活動を行います。最終的には劇やペープサートなどを用いて表現活動を行います。

#### (2) 紹介・案内を題材とした「発表・発信型プロジェクト」(同(B))

このプロジェクトは、調べたり、体験したりしたことをまとめて紹介や案内する活動を行います。最終的には、発表やプレゼンテーションを行います。

#### (3) 買い物などを題材とした「相互交流型」プロジェクト(同(C))

このプロジェクトは、題材として買い物や海外旅行などを取り上げ活動を行います。最終的には、相互に対話しながら物を購入したり旅行したりします。

### □ 絵本型プロジェクトにおける絵本の選定

絵本型プロジェクトを組むためには、まず、絵本の選定が必要となります。選定の基準として、次の6点が考えられます。

- ①学習の目的に合った言語材料があり、絵本の主題やトピックが明確
- ②定型表現<sup>1</sup>による繰り返しを多用
- ③英文は1文が、原則として5語以内<sup>2</sup>
- ④発達段階に応じた期待や見通しが可能
- ⑤絵が英文の理解を助けるものである
- ⑥場面は5～7場面のもの

絵本は *Where's Spot?* のような輸入版から選ぶことができますが、上の条件を満たしていれば、日本の絵本、あるいは、英語が原文でない絵本を簡単な英語に訳して使うことも可能です。また、教材としては余り紹介されていない絵本、例えば、*Something from Nothing* (Phoebe Gilman・日

1 定型表現とは、ある場面で使われる定まった表現やモデルダイアログ(例えば、“Brown Bear, Brown Bear, what do you see?” “I see... looking at me.”)というように単語の置き換えが可能な表現形式と考えます。定型表現の利点は、①場面の中で適切に使われるものを選択しているため、誤りがない、②同一の表現を何度も繰り返し聞いたり言ったりするために、型を繰り返し練習する「パターン・プラクティス」を結果的に行うことで流暢さが増すという特徴があります。絵本などにおける定型表現を使つての活動は、児童全員が理解できる基本的な共通の表現(文型)を使いながら、必要に応じて、また、児童の選択により、創造性を持たせることが可能となります。

2 本誌6月号の注3(p.56)を参照。1文が5語(群)以内の理由は、「いつ、誰が、誰に、何を、どうしたか」の情報がほぼ含まれるからです。5語を超えれば2文にするか、対話形式にして、やりとりをさせます。

本語版タイトル【おじいさんならできる】の中の会話文のみを取り上げたり、内容をALT等に簡単にしてもらったりして使うこともできます。

### □ 絵本型プロジェクトの実践例

第5学年の1学期に実施したプロジェクトを例にとってみます。まず、児童にどのような力をつけたいのか、どのような活動をさせたいかということを考えて目標を設定します。目標は、指導と評価との一体化を図りながら考えていきます(詳細は9月号で紹介しません)。表1は、プロジェクトの「目標」と「3つの評価の観点」<sup>3)</sup>を、表2は単元構想を示しています。【英語ノート】は、プ

表1 第5学年「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」の目標と評価の観点

①グループで協力して、意欲的にクイズを作り絵本に仕上げる (関心・意欲・態度)
②お話の面白さや英語のリズムの楽しさを味わい、発表やクイズを通して2年生と英語のやりとりを楽しむ (コミュニケーションの力)
③絵本 <i>Whose Nose and Toes?</i> に使われている表現を知る。 (言語に関する気づき・理解)

表2 第5学年のプロジェクトの単元構想(全8時間・24M)

① <i>Whose Nose and Toes?</i> の絵本を聞こう(2時間・6M) …【英語ノート①】 <i>Let's Enjoy 1</i> を活用)
②クイズを作り、絵本にまとめよう。(4時間・12M) …【英語ノート①】 Lesson 7「クイズ大会をしよう」を活用)
③2年生に絵本を使ってクイズをしよう。(2時間・6M)

表3 児童の感想の変容

観点	児童の反応	
	練習の後	⇒ 2年生への発表の後
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループで練習するのが楽しい。もっとやりたい。</li> <li>2年生の人に早く英語を教えてあげたい。</li> <li>2年生に聞かせるまでには、もっと練習して上手になりたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2年生がクイズを楽しんでくれたので練習したかいがあった。また、1年生や2年生にクイズや話を聞かせてあげたい。</li> <li>今度は、違う絵本を使ったり、一から絵本作りをしたい。</li> </ul>
コミュニケーションの力	<ul style="list-style-type: none"> <li>はっきりした声でわかりやすく発表したいです。</li> <li>班のみんなが協力できたし、班のみんなが言えるようになったのがよかったです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2年生が質問に答えてくれてうれしかった。</li> <li>最初は2年生が英語がわからないところもあったので不安だったけれど、だんだんとわかってきてよく楽しんでくれたのでほっとしました。</li> </ul>
言語に関する気づき・理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>知らない言葉がたくさん出てきたけど、今日のクラスの発表会でよくわかりました。</li> <li>新しい言葉をマイケル先生に教えてもらってよくわかりました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2年生の質問や感想で、英語の言葉を教えてあげたときに、自分で練習して言えるようになっていたと思いました。</li> </ul>

プロジェクトにおける言語材料の導入や練習の場面で必要に応じて活用します。

学級担任が中心となって授業を進め、「2年生にクイズをする」という課題(タスク)解決に向けてそれぞれのグループが、例えば、「古代生物に関する絵本を作り、クイズを作って2年生に発表する」などの具体的なゴールを決めて取り組みます。読み聞かせや発表練習をする場面では、必要に応じてALTなどから支援を得ます。グループごとの話し合い、学級でそれぞれの発表についての相互評価、活動の自己評価などは日本語で行います。

プロジェクトでは学習プロセスを大切に、児童の様々な活動による変化を重視します。表3は、評価の観点別に、児童自らが決めたゴールへ到達するまでの「練習の後」と「2年生への発表の後」の課題意識の変化を児童の振り返りから引用し対照したものです。

表3より、児童が「2年生に聞かせる」「クイズをする」という課題意識を常に持ち続けて活動していることがわかります。「練習の後」では、発表する側の児童自身についての振り返りとなっていますが、「2年生への発表の後」では、聞き手である2年生の理解度などについて触れられており、相手を意識して活動していることがわかります。一方、「発表の後」の2年生の児童からは、

3 評価の観点は「関心・意欲・態度」「コミュニケーションの力」「言語に関する気づき・理解」の3つで、9月号で解説します。

表4 絵本を用いた外国語活動の言語材料と指導上の留意点(例)

学年	使用絵本 プロジェクト名 配当時間(1M=15分)	主な表現・語彙など	指導上の留意点
6	<i>I LIKE ME!</i> My Story Book を創ろう  全9時間=27M	I have a best friend. That best friend is me! I do fun things with me. I draw beautiful pictures. I ride fast! (中略) When I feel bad, I cheer myself up. When I fall down, I pick myself up. When I make mistakes, I try and try again! No matter where I go, or what I do, I'll always be me, and I like that!!	<ul style="list-style-type: none"> <li>・太字で示した動詞、表現などを使って自分を表す絵本を創るので、絵本表現をすべて使うわけではない。</li> <li>・英文は1文が5語群以内とする。</li> <li>・棒読みにならないように、聞き手に理解してもらえるように話す姿勢を練習する。</li> </ul>

「最初は、何の動物かわからなかったけど、ヒントを聞いているうちにだんだんとわかって予想するのがおもしろかった」「5年生になったら僕もやってみたい」など、異学年交流が楽しかったことや将来の活動への意欲などが聞かれました。

大切なことは、1つ1つのプロジェクトが児童の発達段階や実態、ニーズに合っていることと、児童が主体的・創造的な活動ができる場面があることです。このためには、「総合的な学習の時間」や教科においても行われてきた活動の前に児童にどのようなことがしたいかを尋ねるニーズ分析が必要となります<sup>4</sup>。

## □ 外国語活動から中学校英語へ渡すバトン

小中学校の連携(接続)を考えるときに、小中学校の教員がそれぞれの授業を参観し合い、意見を交換することは大切なことです。中学校英語科の教員が知りたいことは、小学校卒業時の児童がどのようなことを知識として持っており(知識知)、それがどの程度実行できるか(技能知)の両面です。

活動で扱われた単語や構造・表現をすべての児童が覚えていたり、理解しているというものではありませんが、全員に共通に提示したものを中学

校に公開することは必要です。加えて、授業後の児童の反応や児童がどこまでできたかなどを文章化して伝える必要もあります。表4のような学習内容一覧を中学校へ報告することは可能であると思います。

プロジェクト型カリキュラムは、課題解決の過程では、母語で各自の目的に応じてグループ学習などでやりとりをしますが、最終的な目的は英語(ことば)で表現することです。発表や表現する場面で自分たちの知識や経験を総動員し、伝えたいことを聞き手に理解してもらおうという本来のコミュニケーションの目的へと繋がります。これは、中学校以降の言語使用のスキル面の伸張を目標とする課題解決型の言語活動である「タスク活動」へと繋がっていきます(高島 2000; 2005)。

次号では『英語ノート』のカリキュラムへの組み込み方、また、文字の扱いについて述べていきたいと思います。

### ◆参考文献

Long, M. (ed.) 2005. *Second Language Needs Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

高島英幸(編著). 2000. 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』大修館書店。

\_\_\_\_\_. 2005. 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク — 34の実践と評価』大修館書店。

東野裕子・高島英幸. 2007. 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店。

(東京外国語大学大学院教授)

4 課題解決型の活動は、第二言語習得研究ではタスク(task)と呼ばれ、タスクを中心としたシラバスで授業を行う Task-Based Language Teaching (TBLT) が教育的効果があるとされています。タスクの選択には、学習者の希望を尋ねるニーズ分析(needs analysis)が通常なされます(Long 2005)が、小学校で授業で扱って欲しいことや行いたい活動を児童に尋ねることと基本的には同じです。

# 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 5 『英語ノート』と文字の扱い

先月(7月)号では、プロジェクト型カリキュラムにおける第5学年の実践と小中連携について述べました。今回は、一教材として全校に配布されている『英語ノート』のカリキュラムへの組み込み方と文字の扱いについて提案します。

### □ 『英語ノート』の教材としての位置づけ

『英語ノート』には、1と2の2種類があります。移行期である今年度は、第5学年はすべての学校が1を、第6学年については、1と2から選ぶようになっています。

構成は、1、2ともに1課を除いては、4時間を1つのまとまりとして9課あります。それぞれの課には、“What's this?”などの目標文があり、それを使って活動するようになっています。また、視聴覚教材として、PC上で『英語ノート』と同じ場面を映し、画面上操作することができ、Let's ListenやActivityなどでは、同時に音声を聞いたり、文字などを書き加えたりすることができる電子黒板用のソフトが付属されています。さらに、音声補助教材としてCD、各課の解説と1時間ごとの授業案例として詳細な展開が示された『指導資料』や活動に使うカードのデータなども配布されています。

授業内容は、1時間の中で教師が次々と活動を与えていく構成になっており、付属教材も完備されているとは言えます。しかし、学級担任が英語を使いながらの授業が前提となっており、学習指導要領の内容と懸隔している印象を持ちます。ほとんどの活動は教師が与える「プログラムの」な

ものになっており、児童が自ら考え、主体的に活動する場面は少ないように思われます<sup>1</sup>。そこで、学校や地域ごとに独自のカリキュラムを作成し、児童が主体的・創造的な学びを体験できるプロジェクトの「基礎部分」として、プロジェクトに用いられる語彙や基本的な表現の提示・練習に『英語ノート』を活用するとよいでしょう(本誌5月号, pp. 68-69)。

### □ プロジェクト型外国語活動における『英語ノート』の活用例

表1と表2は、本誌5月号(p. 69)で示した第5・6学年の35時間のカリキュラムに『英語ノート』を組み込んだ例です<sup>2</sup>。

表1中の第5学年の3学期のプロジェクト「世

1 「指導資料」の授業案例に従って授業を進めることは可能でしょう。しかし、中教審の『答申』(平成20年1月)に示された「国際コミュニケーションを重視する」考え方、また、学習指導要領の「目標」に示された「コミュニケーションの素地の育成」や「指導計画作成にあたっての留意事項」を考慮するならば、「指導資料」の授業案通りに授業を進めると矛盾が生じることになります。外国語活動のカリキュラムやシラバスは、児童の発達段階を考慮し、地域の実態に合い、小学校段階で重視される体験的な活動を行い、児童の興味を喚起するような身近な内容や他教科との関連を図った授業内容で構成されるものでなくてはならないからです。

2 表1と表2とは逆に、『英語ノート1, 2』の各課を中心に、対応するプロジェクトを載せている表は紙面の都合で割愛しています。外国語活動の時間で、『英語ノート』のすべての課を網羅する必要はありません(網羅する必要のあるものは学習指導要領に記載されている内容です)。例えば、表1に、『英語ノート1』の「L8 時間割を作ろう」がありませんが、表にはないプロジェクト「学校を紹介しよう」や「ボードゲームを作って遊ぼう!」などを進める際に、学習していることを紹介したり、好きな教科を尋ねたり言ったりする練習場面で使用することができます。

表1 第5学年の年間35時間のプロジェクトにおける「英語ノート 1」の活用

学年	学期	プロジェクト名 (使用絵本)	活用内容
5	1	オリジナルの「ブラウンベア」を作ろう (絵本 <i>Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?</i> )	「L1 世界の「こんにちは」を知ろう」のあいさつ、「L2 ジェスチャーをしよう」の気持ちを表す表現や「L4 自己紹介をしよう」は、毎時間のあいさつなどに利用
		ショッピングモールを開こう	「Let's Enjoy 2 かくれている動物を探してみよう」を動物の言い方の練習に使用
	2	何て説明するの？	「L3 数で遊ぼう」を値段を言うための数の練習に使用 「L5 いろいろな衣装を知ろう」を買い物で使う表現の練習に使用
		2年生にお話を聞かせてあげよう！ (絵本 <i>From Head to Toe, Whose Nose and Toes?</i> )	「Let's Enjoy 1」を体の部位、動作の定着に利用 「L2 ジェスチャーをしよう」を動作の言葉の定着に利用 「L7 クイズ大会をしよう」の導入ページをクイズ作りの導入に使用
	3	世界の料理を調べ、レシピを作ろう！	「L6 外来語を知ろう」の各国の料理紹介の部分を導入に使用
		アルファベットを使ったことばを見つけよう！	「L9 ランチ・メニューを作ろう」のビンゴゲームなどを導入に利用 「L6 外来語を知ろう」をアルファベットを使ったことばの分類時に使用

表2 第6学年の年間35時間のプロジェクトにおける「英語ノート 2」の活用

学年	学期	プロジェクト名 (使用絵本)	活用内容
6	1	地図を使って自分の家を紹介しよう！	「L5 道案内をしよう」を導入と練習に使用
		5年生にわかる「ポーラベア」を聞かせてあげよう！ (絵本 <i>Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?</i> )	「L8 オリジナルの劇をつくろう」をプロジェクトの導入に利用
	2	日本文化を紹介しよう	「Let's Enjoy 2 世界遺産を知ろう」と巻末の「世界に発信する日本の文化」を導入に利用
		Who am I? 歴史クイズを作ろう	「L2 いろいろな文字があることを知ろう」を日本文化を考える際に利用 「L3 友だちの誕生日を知ろう」を行事の日付の言い方に利用
	3	My Story Book を創ろう！ (わたしの夢、ほくの夢) (絵本 <i>I LIKE ME!</i> )	「Let's Enjoy 3 いろいろな職業の言い方を知ろう」を導入と練習に使用
			「Let's Enjoy 1」「L4 できることを紹介しよう」「L7 自分の一日を紹介しよう」 「L9 将来の夢を紹介しよう」を語彙の提示や練習に使用 「L1 アルファベットで遊ぼう」を中学校英語への興味付けとして利用

表3 「世界の料理を調べ、レシピを作ろう」の単元構想 (第5学年2学期)

プロジェクトの単元構想 (全8時間・24M, 1M = 15分)	
①料理に使う表現を知ろう (2時間・6M)	…《「英語ノート 1」L6「外来語を知ろう」の「ほしいものは何ですか」を活用》
②世界の料理を調べ、レシピを作ろう (4時間・12M)	…《「英語ノート 1」L9「ランチ・メニューを作ろう」を活用》
③料理のレシピを発表しよう (2時間・6M)	

世界の料理を調べ、レシピを作ろう」を例に少し解説を加えます。このプロジェクトの単元構想は表3の通りです。児童のゴールは「調べた料理のレシピを発表する」ことです。ここでは、『英語ノ

ート 1』の6課「外来語を知ろう」の Let's Listen 1 の国と料理を結び付ける活動や、9課の「ランチ・メニューを作ろう」のキーワード・ゲームなど、料理名の例を提示するときに使います。

また、「英語ノート 1」の6課では、導入に日本語と英語の発音は異なることが取り上げられています。この部分を先に学習しておき、3学期のミニプロジェクト「アルファベットを使ったことばを見つけよう」に繋げていくこともできます(本誌5月号(p.69)参照)。

## □ 結果的に学習している文字

新学習指導要領の国語科では、ローマ字の学習は第3学年に規定されています。これに対して外国語活動では、アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、外国語活動の中で児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いるとしています。

学習への積極的な取り組みやその持続には、強い動機に勝るものはありません。このため、ローマ字学習をした後、アルファベットへの児童の興味・関心が高まる時期に、外国語活動で児童自らが「学習」する方法が考えられます。国語科におけるローマ字学習とも関連し、低学年におけるゲームなどを通してアルファベットの読み方を知っていること(潜在的な知)を利用して体系的に考えていきます<sup>3</sup>。

このミニプロジェクトは3時間扱いで、以下のように、①ローマ字を復習しよう(1時間・3M)と②このことば、英語?日本語?(2時間・6M)といった流れで進めることができます。

① 最初に『英語ノート 1』の6課の「外来語を知ろう」や衛星放送番組の大リーグの野球中継の録画などを使い、外国語と外来語としての日本語の発音は違うことや、野球用語などでは、英語を組み合わせた和製英語(例えば、英語ではinside-the-park home runが日本語では、ランニングホームラン)などがあることなどを知らせ、身近な生活の場にあるアルファベットを使ったこ

とばを探すという課題を提示します。アルファベットを提示する前により親しみやすくするために既習のローマ字の復習などを行います。

② アルファベットが用いられている広告や看板などの資料を提示し、気づいたことなどを話し合かせます。そして、児童自身にも、身近にあるアルファベットを使ったことば探しをさせます。見つけてきたことばを整理します。ここでは、ローマ字、外国語(英語)、和製のことばなどに分類することができます。英語に分類された単語にアルファベット26文字のどの文字が、何回使われているかを数え、これを集計し一覧表にします。それをコーパス(例えば、Brown Corpus)から得られた資料と比べたり、見つけてきたことばの意味を、子どものための英和辞典や絵辞典などを使って調べたりすることもできます(高島・東野2007参照)。

このように、文字学習のためのミニプロジェクトにおける活動は、あくまでも児童が自主的に調べることから学習が始まり、文字の頻度をまとめていく際に文字を相互に確認し合う中で自然とアルファベットを発音していくように仕組んであります。これが児童自らが学ぶ文字学習であり、教師が教え込む文字指導とは根本的に異なります。

次号では、外国語活動における評価について述べ、最後に、プロジェクト型外国語活動と課題(タスク)についての総括をしたいと思います。

### ◆参考文献

高島英幸・東野裕子. 2007. 「公立小学校におけるプロジェクト型カリキュラムの展開: プログラムからプロジェクト型英語活動への転換と文字学習〈後編〉」『教職研修』9月号. 94-106. 教育開発研究所.

(東京外国語大学大学院教授)

3 第4学年(新学習指導要領では第3学年)のローマ字学習後、低学年のうちに発音やある程度は識別できるアルファベットの大文字・小文字をともに練習することは可能です。ヘボン式ローマ字では、アルファベット26文字の内、22文字まで同一です。ローマ字のヘボン式と訓令式とアルファベットの違いについて表記例と共に示してあります。

方式名	使用するアルファベットの文字数	アルファベット(26文字)中使用しない文字	表記例
ヘボン式	26文字中22文字	L, Q, V, X	Fuji(富士), shima(島), chizu(地図)
訓令式	26文字中19文字	C, F, J, L, Q, V, X	Huzi(富士), sima(島), tizu(地図)

# 連載 小学校外国語活動はプロジェクト型で!

学習指導要領の趣旨に沿った活動のあり方

高島英幸  
Takashima Hideyuki

## 6 プロジェクト型外国語(英語)活動の提案

〈最終回〉

先月(8月)号では、児童が主体的・創造的な活動を行うプロジェクトの基礎の部分に『英語ノート』を組み込んで活用する例と文字学習について述べました。最終回では、プロジェクト型外国語活動の実践に関わる「評価」について述べ、6回にわたる連載の総括をしたいと思います。

### 外国語活動の評価の観点と評価例

学習指導要領に記載されている外国語活動の目標は「コミュニケーション能力の素地を育成する」ですが、中教審の『答申』では「コミュニケーション能力を育成するための素地をつくること」と、より意味のある表現となっていました(両者の差については、高島 2008)。いずれにせよ、コミュニケーションへの意欲、外国の文化や自国文化への関心や態度、日本語を含めたことばやことば以外の手段でのやり取り、ことばに関する気づきや理解などの能力の育成が求められています。学習指導要領の目標からも、次の3つが評価の観点として適切です。

- ① 活動や異文化に対する「関心・意欲・態度」
- ② 聞くこと・話すことに関わる力や他者と交流する力としての「コミュニケーションの力」
- ③ 「言語・文化に関する気づき・理解」

観点①は、児童の活動への取り組み方など、意欲や対象となる異文化に対する関心などを評価します。評価は活動を観察し、様相や兆候を見取り、

1 これまでも言語面のみならず、言語の背景となる文化面も視野に入れながら評価していましたが、文化についても明示的に示す必要があると考え、「言語・文化」としました。

児童の名簿などに記録していくことになります。

観点②は、外国語活動において中心的な活動である「聞くこと・話すこと」を表裏一体と考え、国語科で求める母語による「伝え合う力」と共通します。スキル面の育成が外国語活動の第一の目的ではありませんが、言語教育の一環である以上はスキル面を無視することはできません。それぞれの場面で必要な英語が言えたり聞いたりできるという技能的な面と、コミュニケーションの基本である相手を意識してことばによるやりとりができる対話的な面を評価内容とします。

観点③は、新しい英語表現を知ったり、英語独自のリズムや強勢などの特徴や日本語と英語の発想の違いなどに気づいたりすることを評価します(詳細は、東野・高島 2007)。また、世界の言語の背景となるさまざまな文化の存在に気づき、理解することが必要で、この点についても評価します。

評価方法としては、教師による評価(観察と成果物による評価)と児童による評価(自己評価・相互評価)があります。上記の3観点で評価し、それを総合して記述式で評価を記載していくことは「総合的な学習の時間」と同じです。

表1は、第5学年のプロジェクト「2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう」の活動②「クイズを作り、絵本にまとめよう」の評価規準と教師による評価(観察や成果物)、児童による評価(自己評価・相互評価)などを整理して文章化した評価例です(実践の詳細は7月号参照)。

学期末の通知票や学年末の指導要録には、それぞれの活動の評価を総合して、以下の「通知票の

表1 第5学年：2年生にオリジナルの絵本を作ってクイズをしよう

活動	評価の観点 (評価規準)	評価文例
活動② クイズを作り、絵本にまとめよう (4時間, 12M)	① 関心・意欲・態度 ・意欲的に表現しようと練習しようとする。	・2年生が楽しむためにはどうすればよいか、グループで話し合い、協力して絵本を作ることができました。 ・絵本のテーマや絵本に登場する動物、ヒントとして見せる部位などを考えて、工夫して表現することができました。 ・2年生に分かるように何度も練習し、発表に使う表現をリズムよく言えるようになりました。
	② コミュニケーションの力 ・2年生が楽しめる工夫を考える。 ・自分の考えと比べながら友だちの意見を聞くことができる。	
	① 関心・意欲・態度 ・他のグループのよいところを取り入れようとする。	・「2年生に伝える」という視点を持って、他のグループのよいところに気づき、それを伝えることができました。また、よりよい発表になるように他のグループにアドバイスすることができました。 ・友だちのアドバイスを聞いたり、他のグループの発表をみたりして、よりよい発表にするためにグループで話し合い修正することができました。
	② コミュニケーションの力 ・他のグループのよいところに気づいて伝えられる。	

評価例」のように記述します。

通知票の評価例

2年生が楽しめるためにはどうすればよいかの話し合いでは、積極的に意見を言い、絵本のテーマ(古代の生物)や絵本に登場する動物、ヒントとして見せる部位などを考えて、工夫して表現することができました。また、英語の発音に気をつけながら、グループで協力して発表の練習をすることができました。

□ 学習過程における児童の意識の変化

評価は何を評価するかと同時に、いつ評価するかが大切です。プロジェクト型の活動では、「総合的な学習の時間」などのように、学習のプロセスを重要視するため、毎時間(あるいは、活動ごとに)自己評価(振り返り)をとります。自己評価の評価項目は、「1. 友だちと話し合いや、やりとりができた」「2. 班で協力して活動できた」「3. 課題や活動について考えた」「4. 英語について新しく知った」「5. 楽しく、進んで活動できた」とします。児童は、項目ごとに4段階「よくできた」「できた」「あまりできなかった」「できなかった」で評価を行うとともに、うまくいったこと、難しかったことや感想などを自由筆記して自己評価します。

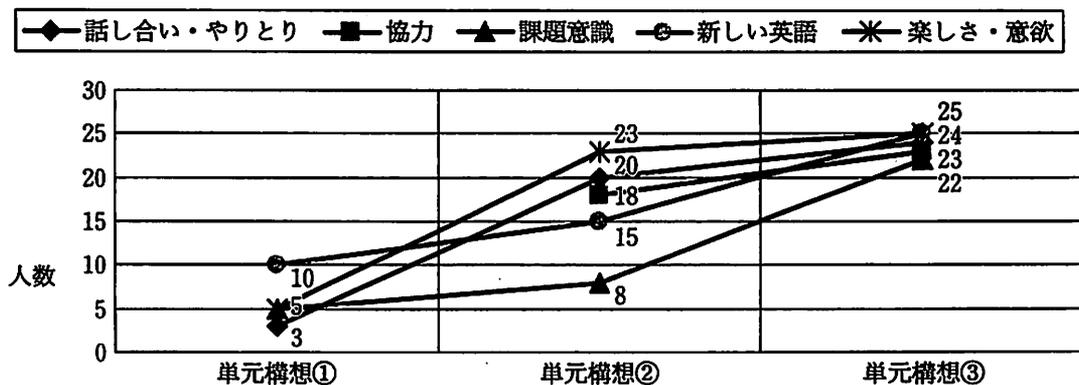
教師にとって、児童の活動に対する評価がどのように変化したか、また、その変化の様子を把握し、授業改善に役立てなくてはなりません。そこ

で、第5学年のプロジェクト「ボードゲームを作って遊ぼう(8時間)」の自己評価の変化を例に、活動の終了ごとに時系列に児童の満足感・達成感を調査しました(東野 印刷中)。

このプロジェクトの単元構想①「ボードゲームに使う英語表現を知り、練習しよう」では、ALTによる新しい表現の導入後、一斉指導の中でALTに続いて練習しました。単元構想②の「ボードゲームを作ろう」では、ボードゲームをグループで話し合っると同時に、グループで英語に関する練習計画を立て、自分たちでCDデッキを操作したり、カードを使いゲームをしたりしながら練習できる場面を設定しました。単元構想③の「ボードゲームをしよう」では、自分たちの作ったボードゲームを使い、自由に遊び、友だちのグループのものも使って遊び、お互いに評価し合う流れとなっていました。

それぞれの活動後の自己評価の「よくできた」のみを時系列でグラフ化し図1に示しました。多くの児童が「よくできた」という評価に変化したことだけでなく、項目3「課題や活動について考えた(課題意識) ▲」や項目5「楽しく、進んで活動できた(楽しさ・意欲) ※」の伸びは注目に値します。児童にとって、最終的に満足感、達成感が得られた活動であったことがわかります(班活動がなかった活動①では、項目2(協力) ■がありません)。

図1 第5学年「ボードゲームを作って遊ぼう」での自己評価「よくできた」の推移（公立小学校児童35名）<sup>2</sup>



## □ まとめ

連載を終えるにあたり、質問に答える形式でまとめてみたいと思います。

Q：プロジェクト型外国語活動で、本当にコミュニケーションへの態度は育つのでしょうか？

A：児童の学校生活における満足度を測る調査で得点が低く学校生活に満足していないA君が、「プロジェクト型外国語活動」の公開授業研究の振り返りの時に、手を挙げました。他の児童が「外国人の先生に聞いてもらえて楽しかった」「お互いにコミュニケーションがとれた」など授業の感想を言う中、「I'm happy.」と英語で言いました。A君が英語で満足度を示してくれたことに学級担任や周りの教師は驚きました。次に、別の児童が手を挙げ、感想は、「I'm very happy.」でした。これに対して、参観をしていた教師たちが唸りました。さらには、次の児童が手を挙げて言いました。「I'm SUPER happy.」まさに、コミュニケーションに対する積極的な姿勢を示している例です。これは、活動に明確なゴールがあり、自由度があ

ることで、児童の興味が持続し、意欲的に活動できた現れです。コミュニケーションへの態度が育った例と言えるでしょう。

Q：プロジェクト型外国語活動で「聞く」「話す」のコミュニケーション能力が育つのでしょうか？

A：言語習得は時間を要します。例えば、中学校から高校3年までの6年間の授業時間数は、少なく見積もって、中学校で315時間（週3時間を年35週）、高等学校で525時間（週5時間を年35週）とすると、合計で840時間です。これに対して、アメリカで英語を学ぶというようなESLの環境（毎日4時間を年200日で6年間）では4,800時間、そして、母語習得（1日8時間として6年間）では17,520時間です（Ortega 2009参照）。とりわけ、日本のようなEFLの環境では英語学習への動機も低い上に、840時間をすべて英語の中で過ごしているとは考えられません。こう考えると、小学校の年間35時間で英語によるコミュニケーション能力が十分に付くとは考えられません。

しかし、オリジナルの絵本を創るなど授業内

2 単元構想③終了後の自己評価の結果は以下の通りです（東野 印刷中）。

評価項目	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1. 友だちと話し合いや、やりとりができた。	24	9	2	0
2. 班で協力して活動できた。	23	12	0	0
3. 課題や活動について考えた。	22	10	3	0
4. 英語について新しく知った。	25	9	1	0
5. 楽しく、進んで活動できた。	25	10	0	0

容を工夫することで、結果的に児童が何度も練習し、また、同じ英語が何度も繰り返されて聞こえてくる環境ができあがります。英語絵本には、コミュニケーションへの積極的な態度が自然と生じる環境に児童を置く力があるようです。

移行期間に、1つでもプロジェクト的な活動を実施してみてもはどうでしょうか。児童の態度や表情に変化が生じ、教員の姿勢も変わります。教員が協力して教材研究や授業を進めることになり、成果を共有することができます。プロジェクト型の活動では、グループでの協同の学びがあり、アドバイスし合い、助け合い、教え合いながら進んでいく過程において、グループの友だちの言うことばもかなりの頻度で耳にします。それが、子どもの聞く力、インプットする力につながっているのです。児童に英語を与えるだけの活動と比べると、活動の「質」や児童が感じる楽しさの「質」の変化に必ず気が付かれるはずですよ。

\*

課題（タスク）を与え、児童が設定したゴールに迫る過程で、英語をいつ、どのように授業に組み込み、母語を基盤としたコミュニケーション能

力の素地を育成するかを、これまでプロジェクト型外国語活動のカリキュラムの中で具体的に提案してきました。私たちは、日々課題解決を行っています。この6か月間、締め切りに遅れないように原稿をまとめることが私の課題（タスク）であり、今回でその課題が解決しました。このように考えると「人生はタスクの連続」です。移行期間のみならず、常に、児童に最も適した外国語活動の授業内容を考えていくことが私たちに課せられたタスクだと思います。

◆参考文献

Ortega, L. 2009. *Understanding Second Language Acquisition*. London: Hopper Education.  
 高島英幸. 2008. 「小学校外国語活動の在り方と授業の進め方」『千葉教育』6月号. 千葉県総合教育センター. pp. 2-5.  
 東野裕子. (印刷中). 「プロジェクト型外国語活動におけるインプット増強のためのカリキュラムの提案—自立学習喚起のための音声指導のあり方—」. STEP BULLETIN Vol. 21. 日本英語検定協会.  
 東野裕子・高島英幸. 2007. 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.  
 (東京外国語大学大学院教授)

『英語教育』10月増刊号予告(9月4日発売)

◆特集Ⅰ 英語教育マルチメディアカタログ

〈目的別メディア活用法〉小学校学校でのメディア活用法(柳 善和)／中学校でのメディア活用法(林 敬泰)／高等学校でのメディア活用法(井出 清)／大学でのメディア活用法(尾関修治)／自己研鑽のためのメディア活用法(松本青也)  
 〈視聴覚教材カタログ〉小学校で使える視聴覚教材／中～大レベルで使える視聴覚教材(柳 善和)  
 〈教育機器カタログ〉電子黒板(柳 善和)／電子辞書(井出 清)／音声機器(井出 清)／映像機器(小張敬之)／App Store (iPhoneとiPod)(阪上辰也)／[コラム] 電子黒板を使ってみました(小川恵子)／電子辞書を使ってみました(中畝 繁)／iPhone, iPodを授業で使ってみました(小張敬之)  
 〈ソフトカタログ〉英文速読ソフト／翻訳ソフト／語彙分析ソフト／英単語ソフト(井出 清)  
 〈ウェブサイトカタログ〉インプットのためのサイト／アウトプットのためのサイト／総合的学習支援

サイト(松本青也)／教材作成・研究のためのサイト(尾関修治+阪上辰也)／国際共同プロジェクトのためのサイト(野口朋香)／[コラム] サイトで教材研究をしてみました(阪上辰也)  
 〈資料〉メディア関連キーワード集(尾関修治+阪上辰也)

◇特別記事 「わたしはこう読む・こう味わう「オバマのことば」」  
 根岸 裕／中井良則／岡田泰弘／西森マリー  
 ◇資料 「高等学校学習指導要領(案)への提言」  
 日本外国語教育改善協議会

◆特集Ⅱ 2009年度の英語教育 総括と展望

英語教育日誌 [2008年4月～2009年3月](伊村元道)／2009年度入試総括(鈴木貴之)／英語教育図書：今年の収穫・厳選12冊(柳瀬陽介)  
 【資料】1. 英語教育関係刊行図書一覧 2. 英語教育関係学会研究会案内 3. 英語関係書・教育書発行所一覧

B5判・128ページ・予価1,500円(税込み)

\*増刊号は定期購読に含まれません。別途ご注文ください。